

高知カツオ県民会議 第10回情報発信分科会 議事要録

2018年5月11日(金) 於：土佐料理「司」

1 宮田座長の挨拶

・広告代理店 大手の電通 山本敏博社長はご自身でカツオを料理し、自分でわら焼きタタキを作るほどのカツオ好き。東京出張の折り、業界関係者の会合などで同席した際、高知を訪れたときに食べたカツオの美味さを絶賛してくれたこともあった。

先だって、カツオ県民会議の活動について話し、ホームページ（HP）へのアクセスもお勧めしたところ、早速メールで返信があり、県民会議の主旨や活動に感激し、ぜひ応援したいとのことだった。個人として協賛していただけるのではないかと。

◇新年度からの新会員の紹介

・さんさんテレビ報道制作局次長 小野 典子さん

前任者 木下局次長の人事異動に伴う後任者として会員に就任

・西村騰写堂 専務取締役 西村 啓さん

西野委員の紹介による新規加入。西村さんは、中土佐町が発行した「土佐のカツオ漁業史」（2001年）と別冊写真集「鰹人海（かつおひと うみ）」の印刷を受注、保管していた写真画像データを県民会議HPのカツオデジタルアーカイブに提供してもらう予定で、近く公開することになっている。西村さんも写真撮影時にカメラマンと一緒にカツオ一本釣り船に2週間ほどの乗船体験があるとのこと。カツオ県民会議の活動に関心を寄せていたという。

◇初出席者とオブザーバー出席者の紹介

・全日本司厨士協会県本部 副理事長 橋田 幸秀さん

橋田さんは、ホテル日航高知旭ロイヤル 洋食調理長。

・和建设 人財プロジェクト推進室 山本 涼子さん(オブザーバー出席)

山本さんは、5月20日の中土佐町「かつお祭り」に県民会議からのブース出展 を担当する。

2 議 題

◇5月20日中土佐町「かつお祭り」へのブース出展について。

①当日の県民会議ブースを担当する和建设 山本さんが出展概要を説明。

・和建设からの参加人数は、今春入社の高知本社と岡山支店の新入社員計 8 人と、本社人財プロジェクト推進室から松村室長と山本の 2 人を合わせた計 10 人が参加する。この 10 人を 2 人ずつの計 5 班に分け、ブース来場者にペイントシールを貼るシール班と、県民会議HPのフェイスブック（FB）掲載用に写真撮影する SNS 班、招待客対応班などがそれぞれの役割を分担する。

来場者が自身も FB などの SNS を利用していたら、そちらでも拡散してもらい、SNS をやっていない人には承諾を得た上で県民会議 FB にアップしていく。また、和建设の FB やリクルート向けで使用しているインスタグラムとも連動させてもらう予定。

・現場ブースのスタッフは全員がオリジナルTシャツを着用する。県民会議のロゴマークなどを入れたデザインで現在、製作中。

・当日は県民会議が作製したペイントシール 3000 枚と県民会議の PR ビラを用意する。また、高知新聞社のフリーペーパー「K+」が「かつお祭り」に合わせて発行したカツオ臨時特集号を出展ブースや招待席テントなどで配布する。ブースは中土佐町が間口 2.7 m×奥行 3.6 mのテントや机、イスを用意してくれる。

・ブース周辺に SNS 画像撮影用に制作した県民会議のバックボードを設置。会場内から来場者をブースへ誘導するようにしており、会場あちこちを移動しながらビラ配布や声かけを行う。来週 14 日(月)に中土佐町への挨拶も兼ねて役場スタッフと打合せを行う。

・なお、ブース出展に関する具体的なノウハウなどを記録に残し、今後のイベントなどに役立ててもらえるように県民会議へ提出する。弊社は毎月 1 回、広報誌「まめの木だより」を発行しており、弊社社長の中澤が毎回、「まめのき日記」というタイトルで原稿を執筆し、次回 6 月で当県民会議の活動を取り上げる予定だ。

・当日は尾崎知事が午前 10 時からのオープニング式典に合わせて来場する。知事には式典ステージに登壇する際に「かつおすきやき」のプリントシールを顔に貼ってもらう手はずになっている。テレビ各社の方は、知事の顔に貼られ

たシールの映像を逃がさないよう、お願いします。

②写真撮影とSNS掲載に伴う肖像権の取り扱い (西野支局長)

・3月の「土佐のおきゃく」イベントで、JCの日和崎委員が中心になって当県民会議の賛同者をSNSにアップしてもらい、当県民会議HPが活気づいた。その一方で、本人の承諾を得ていない写真撮影やウェブ上での公開は、肖像権の侵害をめぐるトラブルにつながりかねないという可能性も否めない。

前回の分科会で自社イベントなどでSNSを活用している企業の担当者にオブザーバーとして来てもらい、実際の運用事例や注意点について話を聞いた。この企業では、写真撮影とSNS掲載に関する本人の承諾は、口頭だけではなく本人の署名を求めているとのことだった。そうした対応は、県内の小学校などでも父母の承諾を文書で得るのが通例になっているようだ。

SNS活用の先行企業からのアドバイスや、学校現場での対応事例などを鑑み、当県民会議も本人署名による承諾を求めることにしたい。また、SNSを活用する場合は、後々のトラブルを避けるために留意する必要があることを県民会議全体で共有しておきたい。

③バックボードの運搬、保管などについて (幹事会事務局 奥代氏)

・先月末に看板業者に発注した当県民会議のインタビュー用バックボードは来週にも出来上がる。サイズは2×2メートル、運搬時には二つ折りに分解できる作りになっている。20日の中土佐町「カツオ祭り」会場への運搬、設営、撤去は、製作した看板業者がやってくれるが、それ以後の保管場所は、当県民会議側で用意しなければならない。については保管先について決めてもらいたい。なお、保管場所が確定するまでの間は、この看板業者が預かってくれる。

→高知新聞放送会館内とする。

・バックボードのサイズを考慮すると、今後のイベントで使用するときにはイベント会場への運搬手段を考えておかなければならない。会員企業による自前での運搬が困難な場合は、業者に依頼するしかない。その場合は運搬費用が伴う。

◇今後のプリントシール運用について (西野支局長)

・プリントシールの初回発注枚数は、中土佐町「カツオ祭り」での配布を手始めとし、取りあえず1万枚を発注した。シール完成時には新聞、テレビで取り上げてもらったり、会員個々で顔に貼ってSNSにアップするなどで宣伝したところ、それなりの反応があり、訴求力もあることが分かった。

例えば、よさこい祭りで踊り子が貼ったりすると、欲しがると人が一気に増え

る可能性もある。カツオ祭りでは無料配布するが、今後、需要がどんどん伸びていったとき、現行のまま無料とするのかどうか。この取り扱いについて皆さんで論議してもらいたい。初回発注分は印刷業者 2 社から相見積もりを取って比較検討、20 数万円余りの費用がかかった。

- ・相応の印刷経費が掛かるから、シールが今後、どんどん普及していったときも無料で配布するわけにはいかないのではないか。原価にある程度プラスした価格で販売し、当県民会議の運営費に役立てることも考えたらどうか。

- ・印刷業者への追加発注は、初回よりも経費が下がるのが通例だ。初回に使った刷版があるから、増刷する場合は製版代が要らなくなるのではないか。

- ・販売する場合、単価が少額になるから売上代金の管理が面倒になる。一般向けに数枚程度の販売にも対応するのは、金銭的にも煩雑になるだろう。企業単位でまとめて買い上げてもらえばどうか。買い上げたシールの使い方はその企業にお任せするという手もある。

- ・シールは 1 枚ずつに切り離さずにシート売りしたらどうか。業者が裁断すればその工程作業のコストも上乘せになるだろうし、バラ売りは管理にも手間がかかる。管理が煩雑にならない販売はシート売りだろう。

- ・増刷した場合の金額やシート売りの件について初回の発注業者に問い合わせ、それを踏まえて妥当な値段設定を検討することにしたい。

《四万十市の中学校が修学旅行先でプリントシールを配布》

- ・昨日、四万十市の旅行代理店からプリントシールに関する問い合わせがあった。同市内の中学生約 40 人が関西方面へ修学旅行で行くにあたり、プリントシールを持たせたいと考えている。修学旅行カリキュラムの一つに、生徒が県産物品の物販を行う計画があり、その際、物販会場への来場者にプリントシールを配布したいという話の内容だった。

シールを何枚持たせるのか、枚数について具体的な数字は出なかったが、参加する生徒数を考慮すると、100 ～ 200 枚くらいか。ついては、枚数にかかわらず無料提供するのか、有料とするのか、協議してほしい。

- ・それぐらいの枚数であれば、中学生が対象であることを教育的に配慮し、無料でも良いのではないか。

→異論は出ず、無料とする。

・プリントシールをただ単に配布するだけでなく、高知カツオ県民会議の主旨を広く知ってもらふ意味から、当県民会議が制作したリーフレット類も配ってほしい。また、中学生には当県民会議のホームページを見てもらい、カツオ資源を取り巻く課題を事前学習し、理解を深めてもらうよう学校側に伝えてほしい。

◇7月分科会で市民も参加できるカツオ講座の開催を提案

(事務局 松島)

・昨年4月のシンポジウムで招聘し、カツオの回遊生態や資源動向について講演してもらった二平章 茨城大学 客員研究員を招き、県民会議の会員だけでなく一般市民も参加できるカツオ講座の開催を提案したい。

講演のテーマは、これまでの分科会などで何度か議論の俎上に上がったカツオ資源の「北緯 20 度問題」が適当ではないかと考えている。3月の分科会でこの問題に話が及んだ際、二平さんに4月の総会で講演してもらったらどうか、との提案があったが、実現しなかった。今年末のWPCFC（中西部太平洋マダロ類委員会）年次総会でも太平洋の島嶼（とうしょ）国との討議では論点の一つになりそうだし、当分科会だけでなく、資源調査分科会など他の分科会メンバーも一緒に理解を深めるとともに、一般市民にも呼び掛けた講演会にしたらどうか。まずは二平さんをお呼ぶことに了解をいただければ、具体的に日程調整にかかりたい。

《質 疑》

・二平さんに話してもらふ内容は、北緯 20 度問題が柱になるだろうが、もう一つ、ひたちなか市（茨城県）が取り組んでいる魚食の普及活動も加えたらどうか。同市が制定した魚食条例（魚食の普及推進に関する条例：平成 28 年 4 月施行）は二平さんがリードしたと聞いている。当県民会議が今後、行政や議会と関わりながら県民運動を展開していくことも視野に入れ、ひたちなか市の取り組み事例を聞くことは有益だろうと思う。

・講演内容は当分科会のみならず県民会議全体に関わる課題だから、より多くの聴講者を集めるために合同分科会の形にしたらどうか。

→ 合同分科会とすることに異議は出なかったが、幹事の実務は当分科会とする。

・二平さんの交通費、宿泊費などは当県民会議の負担としたい。昨年9月、WPCFCに関する講演会開催で早稲田大学の真田康弘研究員を招いたケースや昨年4月のシンポジウムで二平さんを招聘したときの経費を参考にしたい。

◇分科会の29年度会計報告と監査報告 (松島、西野より)

・前回3月26日の分科会で当日時点までの収支を報告したが、その後、プリントシールの業者外注に伴うデザイン料の支出が生じたので、3月末締め
の収支をあらためて報告。分科会予算として収入100,000万円、支出43,302円、
予算残額56,698円を次年度へ繰り越す。

・領収書類や現金残高をチェックしたが、問題なかった。

◇「ペンシルかつお」問題について現地報告 (高知新聞 福田記者)

※極小サイズのかつお節をサンプルとして実際に提示。

・フィリピン方面の熱帯海域で行われている極小カツオ漁も資源減少に影響を及ぼしているのではないかという問題意識から、カツオ節の国内主要産地、鹿児島県枕崎市のカツオ節生産者らを訪ねてきた。高知県内のカツオ節生産量は、全国ベースのシェアでいうと0コンマ%の量しかなく、統計上は事実ないに等しいくらい。カツオ節業界の実情を県内で把握するのは困難なので鹿児島で取材した。

・国内の大手企業にはフィリピンで加工された極小カツオ節を輸入し、出汁(だし)の原材料に使っている企業がある。カツオ節生産者は海外巻き網によるカツオも使用しないと節の原魚を調達できなくなっている。鹿児島のカツオ節加工用の原魚はかつて、高知の一本釣りがほとんどだったが、いつの頃からか、そうでなくなった。カツオ節生産者たちはカツオの腹を割いて内蔵を取り出す作業を日々行っているから、近年の原魚の小型化を手にとって目の当たりにしてきた。カツオ節の原魚は巻き網によるカツオが主体だが、去年は不漁による調達困難から、アフリカのガーナからも調達したという。

・国内にはカツオ節の原魚をめぐるこうした背景があり、加工生産者は熱帯海域での巻き網漁規制について声を上げづらいのではないかと考えていた。しかし、カツオ節原魚の調達難や原魚の極小化、さらには巻き網漁でさえ漁獲が安定しない現状に直面し、加工生産者らは不安感を強めている。自分たちの次の世代に事業を継承していけるのか、事態がここに至って生産者団体からも声が上がりはじめた。

これは大きな転機だ。カツオ節の国内3大産地は鹿児島県の枕崎、山川、静岡県焼津。これらの産地間ではカツオの資源問題についての現状認識や危機感に大きな温度差があるが、鹿児島では高知カツオ県民会議の活動に関心を示しており、共通の危機感を背景に連携パートナーとしての潜在的可能性を感じた。

・カツオの生態や資源問題を研究している二平さん（茨城大学 客員研究員）が事務局長を努めている「全国沿岸漁民連」は近く、カツオ節業界の2団体に対し、ペンシルかつおの輸入や使用を差し控えるよう要請する。

《質 疑》

・体長の小さいペンシルかつおは、巻き網の編み目に掛かるのか。

→フィリピン、インドネシアの沿岸では「リングネット」と呼ばれる小型の巻き網で盛んに漁獲しているようだ。ただ、具体的にどんな漁法なのか、どういった漁業者が漁獲しているのか、輸入している日本の企業はどこなのか、一連の流れのはっきりした実態は分かっていない。

・「ペンシルかつお」の問題はまず、広く一般にも認知してもらい必要がある。現物を目にするだけでも痛々しい。このサイズは生後どれくらいなのか。

→まだ1年経っていない。生後何カ月というサイズだろう。このサイズは産卵海域にしかいない。フィリピン方面の熱帯海域で数多く漁獲されているようだ。

・先日、東京のかつお節製造・販売に関わる老舗の社長と話をしていたときに、ペンシルかつお問題に話が及んだ。この社長は日本鯉節協会の会長を務めており、カツオの資源問題に関心を持っていた。高知を訪ね、カツオ県民会議の関係者と交流したいとも話していた。直接、カツオ漁に関わる業界だけでなく、こうした加工・流通分野の人たちと連携することに新たな展開が期待できるのではないかと感じた。

・「ペンシルかつお」を扱っている国内業者は特定できているのか。

→（大体のところは）ほぼ、何となく…。大手企業など数社ぐらいのようだ。一般消費者にとっては、輸入されたかつお節が大きかろうが、小さいかろうが出汁用に粉碎加工された製品の由来は分からないため、背景にある問題が見えない。

◇巻き網漁の現況について

（高知新聞 八田記者）

一般社団法人「海外まき網漁業協会」（東京都中央区）中前明会長へのインタビュー報告する。

・中前会長は元水産庁次長で、国際的な漁業交渉では政府代表団のメンバーを務めたこともあるという。中前会長によると、太平洋熱帯域で巻き網漁を行っている大型の巻き網船を「海巻き」とひとくくりにされるが、日本船と日本以

外の大型船の2つに大別され、大きな違いがある。日本船は国内の漁業規制対象となり、隻数制限があるため隻数を増やすことができず、大型化もできない。ここ20～30年の漁獲量はずっと15トン～20トンのまま推移している。熱帯海域の漁場へ行くまで約1週間を要し、漁獲したカツオを船倉に満載して帰港する。

これに対し、中国系資本の大型船は、船籍を太平洋の島嶼（しょう）国にした巻き網漁で、投資ビジネスの性格が強い。船団を組んで漁を行い、漁獲したカツオを大型輸送船に現場海域で移し替え、タイなどの巨大加工場へ輸送。漁獲高が右肩上がりが増え続けている。日本は相対的に漁獲高が伸びない状況で、国際的立場は弱体化しているということだった。

・先日、熱帯海域でのカツオ漁の国際規制をめぐる話を日銀関係者としていたら、こんな話になった。「国際的な漁業規制は、漁場での捕獲に関するアプローチは当然だとしても、（大型巻き網船を使う）海外企業はその資金をどう調達しているのか、国際金融の実態はどうなっているのか、そうした資金源からのプレッシャーもボディーブロー的に効果がある場合も考えられる」という主旨だった。

・例えば、環境問題の活動家は、不法な漁獲による水産物加工を行っている国際的企業に金融面からプレッシャーを掛けるという手を実際に考えているようだ。国連が掲げる「エス・ディー・ジーズ」の考え方に連動する活動だ。

※SDGs（エス・ディー・ジーズ）：Sustainable Developmento Goals

2015年9月の国連サミットで採択された持続可能な開発目標。「つくる責任、つかう責任」「人や国の不平等をなくそう」など17分野で目標を掲げ、2016年～2030年を達成期間とし、国連加盟193カ国が採択された。17分野の目標のうち、「海の豊かさを守ろう」があり、海洋と海洋資源を持続可能な開発に向けて保全し、持続可能な形で利用するという内容。「20年までに、乱獲や違法・無報告・無規制（IUU）漁業、破壊的漁業慣行を撤廃する」などの具体的なターゲットも盛り込まれている。

・欧米では国際的NGOが、乱獲や違法・無報告・無規制（IUU）漁業による漁獲物を扱う企業に対して消費者運動を起こし、やめさせるという活動を行っている。極小サイズのペンシルかつおを買う企業があるから漁も加工業が成り立つという構図がある。

→このサイズのカツオ漁を行っているのは、主としてフィリピン沿岸のようだ。地元の零細な漁業者たちがこのサイズを狙って漁獲し、カツオ節に加工す

る産業が成り立ち、日本企業が輸入して出汁に加工、国内の消費者が買って消費する。「ペンシルかつお」を通して、そうした関係性が見えてくる。

カツオの来遊減少の要因として、大型船による巻き網漁だけが「けしからん」という単純な話ではなく、国内の我々も消費者として関わっている。また、現地の加工業者にしてみれば、「かつては漁獲しても洋上で捨てていたサイズのカツオを有効に利用している」という言い分があり、経済の論理が複雑に入り組んでいる。

・そうなってくると、(乱獲やIUU漁業の)どこまでに目くじらを立てるかという問題になりかねない。フィリピン沿岸での零細漁業者による極小カツオ漁が日本近海へのカツオの回遊にどの程度の影響を及ぼしているのか。影響がないとしたら資源問題の核心から離れていくことになり、周辺の問題にとらわれはじめると、終いには一本釣り以下は全部だめ、という論調になりかねない。

・「ペンシルかつお」問題は広く一般にも問題意識を持ってもらう意味でインパクトがあり、見た目にも痛々しい。カツオ資源にとって重要な意味を持つ熱帯海域でのカツオ漁がどのように行われているのか、(大型船による巻き網漁も含めて)全体像を俯瞰できるのは良いのではないか。

◇今後のロードマップに関する提案 (西野委員から)

①高知城歴史博物館の文化講座が5月26日にスタートする。講座の内容を議事録として残す方針だが、録音テープを起こす作業をどうするのか、課題として残されている。録音自体は同博物館側が準備することになっている。テープ起こしは外注するしかないのだろうが、第2回以降も支出経費を伴う問題なので検討してもらいたい。

・テープ起こしは時間と労力を要し、われわれでやるとかなりの負担を覚悟しなければならない。

・外注業者が起こした成果物は、基本的にしゃべりのまま、ベタ打ちの文が続く。ホームページにアップするのであれば、読みやすくするため改行や見出しなどの編集作業が必要になるので、負担軽減からテープ起こしだけでも外注がいいんではないか。

・業者に外注したは費用はどれくらい掛かるのか。

→ 時間にもよるが、概ね3万円余りだろう。

→ テープ起こしは外注することとする。

②黒潮町が主催する「土佐さがのもどりカツオ祭」の日程が10月13日(土)

に決まり、同町から当県民会議にブース出展の依頼があった。中土佐町の「かつお祭り」では和建設さんがブース出展の要員を引き受けていただいたが、黒潮町でのブース出展とこれに伴う要員の提供はどうするのか、検討を始めなければならない。

・黒潮町からのブース出展依頼ということであれば、同町からある程度の要員を出してもらおうよう、協議を進めたらどうか。

→ 幹事会での検討案件とする。

※幹事会の席上、会員企業からブース出展の意思表示は出なかったが、その後、高知銀行から担当を引き受けたいとの申し出があった。

◇その他

・当県民会議のホームページに「各種ダウンロード」というバナーボタンを設けている。ここから当県民会議のリーフレットやロゴマーク、ステッカー、シールのデータを取り出せる。使用したい場合は、事務局に一声かけて活用する仕組みにしている。ここには「K+」に掲載した村岡マサヒロさんの4コマ漫画を発行後にアップする予定。また高知城歴史博物館の文化講座パンフレットなど当県民会議の情報発信力の強化に使えるものはアップしていく方針だ。

・旭食品が6月6日、全国から食品メーカーのトップを集めた会合で高知新聞のフリーペーパー「K+」、カツオ特集号を配布し、当県民会議の活動やカツオ資源をめぐる話をする事になっている。また当県民会議への会員勧誘の声掛けもしてくれるようだ。

→ 当県民会議の会合に出席するのは困難だから、会合には出席しないが、応援、協賛はするという位置づけの「協賛会員」があってもよいのではないか。

→ 会員企業や県外の協賛会員など今年度は広がりを図っていく仕掛けを考えたい。

→ 当県民会議のようなNOP的性格が強い活動は広く共感が得られる要素を持っていると思う。活動の主旨に理解が広がれば、クラウドファンディングによる資金集めも可能性を感じる。

◇6月分科会は6月15日（金）16：30から土佐料理「司」で開催。

終了後、西野共同支局長の送別会を兼ねた懇親会を行う。

以上

第10回情報発信分科会 出席者

2018/5/11 正午～ 於：土佐料理「司」

座長	宮田 速雄 (高知新聞社代表取締役社長)
副座長	竹内 太一 (株式会社 土佐料理司 代表取締役社長)
副座長	久松 朋水 (株式会社太陽 代表取締役社長)
	西野 秀 (共同通信高知支局長)
	小野 典子 (さんさんテレビ報道制作局次長)
	福島 和彦 (テレビ高知企画事業部)
	越智 義久 (RKC高知放送報道制作局次長)
	北澤 和彦 (NHK高知放送局長)
	橋田 幸秀 (全日本司厨士協会高知県本部)
	小笠原慶二 (県地産外商公社)
	川渕 良幸 (「土佐かつお」さん)
新規会員	西村 啓 (西村騰写堂専務取締役)
オブザーバー	山本 涼子 (和建設 人財プロジェクト推進室)
オブザーバー	中田 勝淑 (高知かつお漁協)
オブザーバー	岩崎 健吾 (県漁業振興課長)
オブザーバー	田井野清也 (県漁業振興課チーフ)
取材	福田 仁 (高知新聞社)
幹事会事務局	松岡 洋介 (幹事会事務局 高知広告センター)
幹事会事務局	奥代 智 (幹事会事務局 高知広告センター)
分科会事務局	松島 健 (高知新聞社社長室)